

霧雨魔理沙のもっとも幸福なひととき

文:10 式戦車

挿絵:伊藤ベク

霧雨魔理沙は、その部屋の扉を開くなり、どこか気圧されるようなところがあって、足を踏み出すことを一瞬躊躇した。それは、以前この屋敷、地霊殿にやってきたとき、彼女と出会ったときの印象を、さらに強めたものである。安楽椅子に腰掛け、物憂げな表情で、魔理沙を見る。彼女を取り巻くように設置されたステンドグラスは、灼熱地獄跡からの揺らめく光によって、彼女を照らし出す。地霊殿の主、古明地さとりは、地底の代表者としての己が権威性を強調せんがため、このような執務室を構えていた。その目論見通り、魔理沙は少なからぬ圧迫感を感じ、尻込みをしたのだ。それを確かめたさとりは一瞬愉快そうに頬を緩ませ、すぐに表情を消す。

「誰かと思えば、貴方ですか。お久し振りですね」

本心か、社交辞令か。平板で感情の籠らない声からは、読み取ることができない。魔理沙は、ここを訪れたことを後悔した。

「貴方の後悔はごく自然なものです。お気になさらず。訪問の理由もおおよそ分かりました」

以前と同じように、さとりは魔理沙の心を読んで、自分一人で話を進めていく。視線を机に落とし、取り掛かって

「何か勘違いしているようですが」

さとりは冷やかに言った。

「ベットと奴隸というのは全く別のものです」

「どこが違うんだ？ 差し出すのが労役か愛嬌かの違いくらいじゃないのか」

ふむ、とさとりは独り言ちて、天井を見やった。

「奴隸というものは、所有物です。そういう意味ではベットと似通った部分があることは事実でしょう。しかし——」
椅子をくると回すと、机の脇にある書棚から、一冊の分厚い帳簿のようなものを引き出した。広げて、一行一行を指でなぞる。

「これには、今までに地霊殿で暮らした全てのベットたちが記録してあります。私に拾われて天寿を全うしたものの、迷い込んできてそのまま居つき、いつの間にかまたどこかへ行ってしまったもの、この館で生まれ、元気に育ち、最後は喧嘩の傷がもとで死んでしまったもの。私は皆の幸福を願ってやみませんでしたし、今もそうです。不幸な最期を遂げたベットたちの名前を全て諳んじてみせましょうか？ ふむ、結構ですか。そういう訳ですから、私にとつてベットたち一匹一匹がかけがえのない存在です。単なる

いた何かの作業に戻る。心は第三の目で読めるのだから、わざわざ相手の顔を見ている必要はない。そうした態度は魔理沙にとって楽と言えれば楽だし、不気味と言えれば不気味だった。

「自分とは独立した存在から弾幕を出すような——貴方の言う奴隸型の——方法について研究したいと、それと、私とベットの関係について知りたい訳ですね。いささか短絡的ですが、訪問の趣旨は理解しました」

相変わらず無関心そうに言うさとりに対して、魔理沙は不愉快そうに唇を歪めた。

「おいおい、まともな客なんだ。お茶くらい出してくれよ」

「私的な理由でわざわざ地底の、中でも一番嫌われているこの場所に訪れている時点で、既に常軌を逸しています。まともではあり得ませんよ」

さとりは笑った。それは自嘲のようでもあり、魔理沙を嘲笑っているようでもあった。魔理沙はそうした言葉に氣にした様子もなく、頭を掻きながら笑う。

「まあ、そんなことはどうでもいい。どうすれば奴隸ってというのは作れるものなんだ？ いろいろ試したが、上手くいかん」

労働力であって代替可能なものとして扱われる奴隸とは全く異なるものと言って良いでしょう。なるほど家事の手伝いなどをさせてはいますが、言わば家賃のほんの一部のようなものです。そうした用途（※ゴマ）に使うのならば、しかるべき方法で従順にしていますよ。実際にはそんなことはしていませんが」

魔理沙は最初に古代ギリシャの高級奴隸の例を指摘しようとして、次にこう思い直した。しかるべき方法とは何だ？ 今はこれこそ引き出すべき情報なのではないか？

「は、本当にそんなものがあるなら、それこそお前の言う通りとつくの昔に使っているんじゃないか？ どうして出し惜しみをする」

魔理沙は期待を表に出すことを苦勞して抑えながら、問うた。問うたあと、古明地さとりにこうした戦術は全く無意味であることを思い出して、抑え込むのをやめることにする。

「おや、少し口を滑らせてしまったようですね。まあ、蛇の道は蛇と言いまして、心を操る妖怪というものは色々な余技を持っているのですよ。仮初にも旧地獄の代表者を務め、是非曲直庁の囑託をも務める者がみだりに使うにはい

「ささか響聲ものの余技が」

「教えてくれ。無理なら使ってみせる」

魔理沙が机から身を乗り出してさとり顔を近づける。さとりは少し驚いたようにしてかぶりを振る。

「嫌ですよ。教えたら使ってしまうでしょう？ 私は責任を問われたくありません」

「そうかそうか」

魔理沙は不敵に笑って、ミニ八卦炉を取り出した。

「それじゃあ、やることは一つだな」

↑

「全く……。乱暴な人だ。知ってましたけど」

敗れたさとりは、呆れたように乱れた服を直す。魔理沙は勝ち誇ってミニ八卦炉を突き付ける。

「さあ、命が惜しければその方法とやらを教えるんだな」

さとりは魔理沙の目を覗き込む。しばしの沈黙に魔理沙が訝るような表情を浮かべたとき、さとりは小さくため息をついた。

「良いでしょう。そうですね。こういうものにはまず一つ、非常に重要なものがあります」

魔理沙は、さとりの視線の先を追った。そこには、さとりが先程見上げていた天井があり、そこからはシャンデリアがぶら下がっている。灯りの一つ一つが妖しく揺らめく。「人間の精神というものは極めて複雑で揺れ動きやすいものです。ちょうどあのシャンデリアの灯りが揺らぎ、シャンデリア自身もまた僅かに揺らいでいるように。お分かりですか？」

シャンデリアの揺らぎは魔理沙には最初わからなかったが、言われてみると振り子のように僅かな運動をしているように思われた。

「ああした振動を増幅させてやるというのは一つの方法です。肉体という頑丈な鎧を纏っている人間の精神を突き崩すのは容易なことではありませんからね。相前に不安定な、特殊な状態に持ち込まないと不可能に近い。私であっても、です。ほら、どんどん揺れが大きくなっていますね？」

魔理沙は、シャンデリアの振幅が次第に大きくなり、視界一杯に広がっているようにさえ見えた。

「そんなに見つめていては眩しいでしょう。何でしたら、目を閉じて、休められたら、如何ですか」

次第にゆったりとしたリズムに変わっていくさとりの声が心地よい。シャンデリアどころか世界が揺れているように感じる。

「お疲れのようですね。客室に、お連れしましょう。さあ、力を抜いて、私が抱えて、連れて帰って、差し上げます」

魔理沙は全身に加えていた力をどこかに投げだした。柔らかくて暖かいものが魔理沙をしっかりと抱き留めている。瞼を閉じた魔理沙は、怪しく光る瞳を酷薄に細めている。さとりの表情を知るべくもなかった。

↑

魔理沙は、急に意識が明瞭になるのを感じた。まるで、被せられていた暗幕が剥ぎ取られたかのように。

「よくお休みでしたね」

声に瞳を開くと、古明地さとりの姿が見えた。いつの間にか眠っていたらしいと魔理沙は見当を付ける。ただ一つだけ、眠る前と比べてさとりの視線がどこか粘着質である

ことだけが気になった。

「そうだ、例の件をまだ教えてもらってないぞ。約束を果たして貰おう」

その言葉に、さとりはどこか嘲笑するような笑みを浮かべる。その意味を魔理沙が考え始めるよりも早く、さとりは話し始めた。

「そのことですが、やはりあの技術を説明するには誰かに施術しなければいけません。だからと言って誰かを捕まえてきてその人物に施術を行うことは、やはり責任ある立場の私に許されることではありません」

魔理沙はいわく言い難い背筋の寒さを感じた。人体のどこかの器官が激しく警報を打ち鳴らしている。

「そこで、貴方自身に施術して実地に体感して貰おうかと思っています。勿論、貴方の同意を前提にして。施術によって貴方の精神ならびに肉体にどのような損害が生じようとも必ず原状復帰を行いますし、肉体的暴力を振るうこともありません。私はこれを地霊殿の主にして旧地獄代表者ならびに是非曲直庁嘱託施設管理者である古明地さとりとして誓約いたします」

普通の人間であれば、こんな提案は検討するまでもなく